

《第 495 回(2022 年 10 月 13 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『グロスターの仕立て屋』ビアトリクス・ポター/さく・え, いい ももこ/やく 福音館書店  
『グロスターの仕立て屋』ビアトリクス・ポター/作・絵, 川上 未映子/訳 早川書房

10 月の読書会では、ビアトリクス・ポター原作の絵本を、異なる訳で読み比べました。今回の課題図書は、1974 年に石井桃子によって訳された『グロスターの仕立て屋』(福音館書店)と、2022 年に川上未映子によって訳された『グロスターの仕立て屋』(早川書房)です。

昔、グロスターに貧しい仕立て屋がいました。ある日、仕立て屋は市長に上着を注文されました。期限はクリスマスの日。しかし、仕立て屋は体調を崩してしまい……。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。以下、石井訳の『グロスターの仕立て屋』は「石井訳」、川上訳の『グロスターの仕立て屋』は「川上訳」と表記します。

●ポターは動物や自然の絵のイメージが強かったが、刺繍の絵もとてもきれい。石井訳から先に読んだ。1 枚目の美しい絵に惹かれた。ネズミの歌のシーンは、注釈が付いているが詳しく分からないところもあった。川上訳は、イメージしにくいところも分かりやすく書かれていた。比較しながら読むのは楽しかった。

●ポターにしては珍しく、人間が主人公で舞台は町中。この時代は手仕事ができる人の需要が高かったということが、絵から伝わる。猫のシンプキンの存在がスパイスになっていい。石井訳は、英語を一語一語丁寧に訳したような感じで、固い印象。でも味わい深くていい。川上訳は文章が分かりやすい。石井訳よりも絵の色がきれい。

●楽しい物語だった。自分がこどもの頃は学校で刺繍をやったから、その時の記憶を重ねながら読むことができた。こどもたちは、物語の面白さと共に、周囲との関わりによって成長するシンプキンの姿を感じ取るのでは。石井訳は、訳した時代の雰囲気がよく伝わる。川上訳は分かりやすく、一気に読むことができた。

●ポターが描く動物は擬人化されていてかわいいいけど、動きや様子は動物っぽい。石井訳に読み慣れていたので、川上訳には少し違和感を感じた。でも、こどもたちに読み聞かせるなら川上訳の方が良いかも。石井訳と川上訳では、ネズミの歌や、草花の訳し方が異なっているのが興味深い。深く掘り下げて読むことができ、楽しかった。

●『ピーターラビット』シリーズは初めて読んだ。シンプキンが仕立て屋の代わりに買い物に行くことにびっくり。石井訳は、訳した当時の雰囲気が出ていて、言葉の意味が分からなくて勘違いしてしまうところもあった。川上訳は、ですます調で書かれていて分かりやすい。

●絵がかわいく、楽しく読めた。ねずみが家を出入りするのに鍵はいらない、と書かれていたところが好きだった。訳は、川上訳は分かりやすく、スラスラ読めた。石井訳は、分からないところはあったものの、それなりに読めたしリズム感がよかった。石井訳の方が好き。草花の訳し方が石井訳と川上訳で違うところがひかかった。

●初めて読んだ。やはりポターの絵は美しい。動物だけじゃなく、洋服の絵も繊細で素敵。刺繍や生地質感が絵から伝わってくる。個人的に、川上訳の方が読みやすい印象だった。石井訳は、あまりピンとこない言葉がところどころあった。ネズミの歌は、石井訳は童謡、川上訳は詩のようだった。読み比べていて面白かった。

●ネズミが恩返しに服を縫い、意地悪な猫は心を入れ替える。ほっこりとした気持ちになる、クリスマスの魔法のお話。川上訳は、分かりやすく訳されていて、ですます調で柔らかい印象。でも、自分の中では石井訳の世界感が出来上がっていて、その世界が好き。

●『ピーターラビット』シリーズに、人間が主人公のお話があると知らなかったのも少し新鮮だった。最後のページの描写は、ねずみたちが仕立て屋の仕事を手伝っていくことを示唆しているようで、ハッピーエンドでよかった。絵や色味は、石井訳は寒色的、川上訳は暖色的な印象。個人的には川上訳の色の方が好き。

次回 11 月 10 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『日本国憲法前文お国ことば訳 わいわいニャンニャン版』

勝手に憲法前文をうたう会/編, 岩合 光昭/写真 小学館

申込み・参加費不要。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更・中止となる場合があります。変更・中止については、オーテピアのウェブ・サイトにてお知らせします。